サンクトペテルブルグ日本語補習校への巡回指導とその実践

―― 学びのユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業 ――

前モスクワ日本人学校　教諭
新潟県新潟市立新潟小学校　教諭　髙　橋　正　志

キーワード：日本語補習校、巡回指導、学びのユニバーサルデザイン

1．はじめに

学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning、以下：UDL）では、「発達障がいのある子にとって分かりやすい授業は、他の全ての子にとっても分かりやすい授業である」という考えのもとに授業づくりが進められる。日本語補習授業校で学ぶ児童生徒の実態について考えたとき、個々の日本語力や知識量、経験量等の差は非常に大きい。更に「学習意欲の低下」「集団での学習に参加しづらい」等の特別な教育的支援を必要とする児童生徒もいる。このような実態から、日本語補習授業校における授業づくりにおいてもUDLの視点を取り入れた授業づくりが重要な視点であると考える。

私は、文部科学省派遣教員として平成14年度から中華民国・台湾の台北日本人学校へ、平成24年度からロシア連邦のモスクワ日本人学校へそれぞれ3年間、派遣させていただく機会を得た。台北日本人学校への派遣期間中には、創設間もない「台北日本語補習班」への巡回指導を行った。モスクワ日本人学校派遣期間中には、サンクトペテルブルグ日本語補習授業校への巡回指導を行った。

今回の実践記録では、UDLの視点を取り入れて実践したサンクトペテルブルグ日本語補習授業校への巡回指導とその実際について報告し、今後の巡回指導の在り方について探っていきたい。

2．サンクトペテルブルグ日本語補習授業校の概要

サンクトペテルブルグ日本語補習授業校は、在サンクトペテルブルク日本国総領事館の協力のもとに平成17年に開校された。

ここ数年の児童生徒数は、20名前後で推移している。年間授業日数は、35日である。サンクトペテルブルグ市内にあるアングロアメリカンスクールの校舎を借りて、土曜日の午前中に授業が行われている。

子どもたちの日本語能力の維持を主な目的とし、授業は、国語を2時間、算数（数学）を1時間、理科・社会・習字等の授業を隔週で1時間実施している。日本の教科書を使用しているが、理科については、実験器具がないので、教科書を基に話し合いを行っている。

授業以外にも、現地校との交流会やクリスマス会、スキー教室等の行事を実施し、児童生徒同士の交流を深める機会を設定している。

3．サンクトペテルブルグ日本語補習授業校の児童生徒の実態

平日は、インターナショナルスクールかロシアの現地校で学習している児童生徒である。在留期間は、2～5年間が多い。ほとんどの児童生徒がインターナショナルスクールに通学している。日本企業の駐在員の子弟がほとんどであるが、父親または母親がロシア国籍の国際結婚家庭の子女で、現地校へ通いロシア語を日常会話としている児童生徒もいる。

平日は英語かロシア語で、個を重視した授業スタイルで1日を過ごす。さらに、通っている学校から膨大な宿題を課され、毎晩必死に取り組んでいる子が多い。そのため週に一度の日本語補習授業校は、子どもたちが友達と自由に日本語で話すことができる唯一の機会にもなっている。よって児童生徒の個々の日本語力や知識量、経験量等の差は非常に大きい。更に「学習意欲の低下」「集団での学習に参加しづらい」等の特別な教育的支援を

必要とする児童生徒もいる。また、中には「日本語での日常会話に難がある」「日本語での文章の読解に難がある」「自己主張が強く協調性に欠ける」等の実態も見られる。

4．巡回指導計画の概要

モスクワ日本人学校の派遣教員が、サンクトペテルブルグ日本語補習校へ巡回指導するのは今回で６回目である。巡回指導当日の日程は、以下の通りである。

①小学校１・２年生での授業実践

・１校時　国語科「言葉遊び」

・２校時　国語科「詩」

②小学校５・６年生での授業実践

・３校時　理科「月の動き」

③現地採用教員との懇談会

・UDLの視点を取り入れた授業づくりについて

・「補習授業校教師のためのワンポイントアドバイス集」に基づいての指導

5．指導と実践

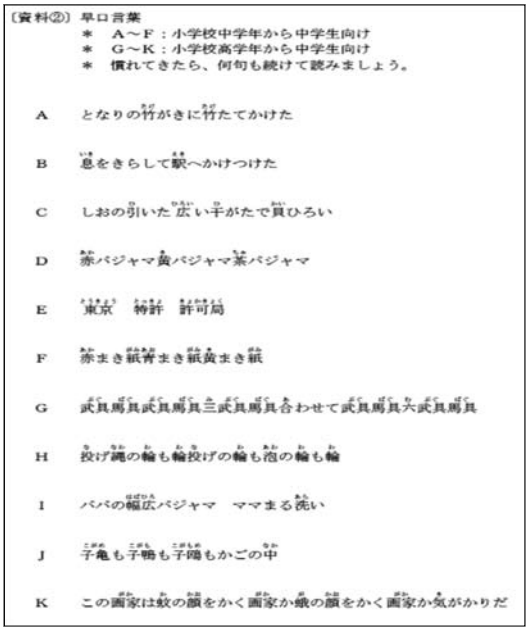
(1) 全員が授業に参加できる工夫

―小学校１・２年生での国語科の授業実践―

①音読練習

小学１・２年生の国語の授業の初めに音読における「口形」を意識させるために、早口言葉の音読練習を行った。音読練習は、児童の全員参加と脳のウォーミングアップ効果も期待できる。扱った早口言葉は、文部科学省のホームページで紹介されている「補習授業校教師のためのワンポイントアドバイス集」からの抜粋である。練習する度にすらすら読めるようになり、「口形」を意識しながら発音する様子が見られた。

国語の授業では、音読練習から始まるという一定の型を決めることによって、児童生徒が授業全体の見通しをもって取り組むことができるという点でも有効である。今後の学習では、早口言葉から名文・詩文へ発展させていくことが考えられる。


〔資料②〕早口言葉
＊　A～F：小学校中学年から中学生向け
＊　G～K：小学校高学年から中学生向け
＊　慣れてきたら、何句も続けて読みましょう。

A　となりの竹がきに竹たてかけた

B　息をきらして駅へかけつけた

C　しおの引いた広い干がたで貝ひろい

D　赤パジャマ黄パジャマ茶パジャマ

E　東京　特許　許可局

F　赤まき紙青まき紙黄まき紙

G　武具馬具武具馬具三武具馬具合わせて武具馬具六武具馬具

H　投げ縄の輪も輪投げの輪も泡の輪も輪

I　パパの幅広パジャマ　ママまる洗い

J　子亀も子鴨も子鶏もかごの中

K　この画家は蚊の顔をかく画家か蛾の顔をかく画家か気がかりだ

補習授業校教師のための
ワンポイントアドバイス集より

②漢字フラッシュカードの利用

日本では、街に出れば看板や宣伝等によってたくさんの漢字がすぐに目に入る。しかし、外国ではそうはいかない。初めて目にする漢字が多いことから、「読み」と「書き」を同時に指導するのではなく、初めに「読み」の指導に焦点化する。読めるようになった上で、「書き」の指導を行う。

フラッシュカードは、右の写真のように漢字の周りにその漢字のイラストを描き、漢字の意味をイメージしやすいようにした。また、裏面は漢字のみとして、覚えた漢字を

漢字のまわりにイラストを描いたフラッシュカード

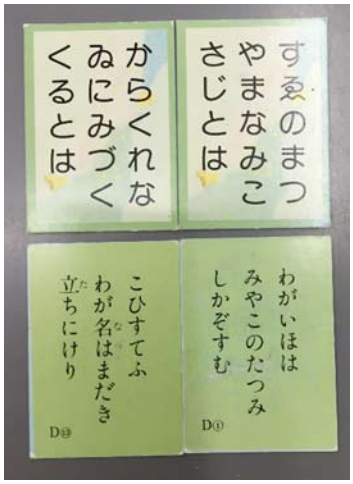
一枚ずつ裏に変えていき、難易度を上げていくこともできる。このような工夫をすることによって、初めて目にした漢字であっても漢字をイメージしやすくなり読み方をすぐに覚えることができた。

③百人一首への取り組み

小学１・２年生での国語の授業で百人一首を紹介した。百人一首は、日本の伝統文化の一つであり、外国に住んでいるからこそ触れさせたい日本古来のカルタ遊びである。使用したのは、20枚ずつ５色に分かれている五色百人一首を使用した。

授業では、児童全員が百人一首によるカルタ遊びを楽しみ、歴史的仮名遣いにも興味をもって音読している姿が見られた。

今後、百人一首を継続的に行えば、家庭学習での暗唱練習への取り組みも期待できる。また、継続的な百人一首への取り組みは、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することにもつながると考える。



五色百人一首でカルタ遊び

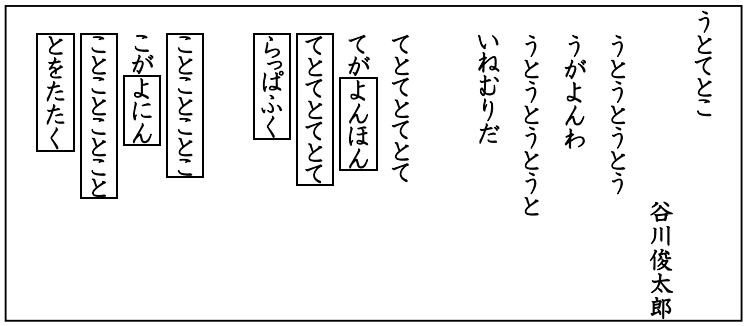
(2)「焦点化」「視覚化」「共有化」の視点での授業づくり

①小学校１・２年生での授業実践　―国語科「詩」―

２時間目の小学１・２年生の国語の授業では、谷川俊太郎氏の詩「うとてとこ」の学習を行った。初めに、「詩の世界に入り、自分の考えを発表できるようにしよう」と声を掛け、詩の題を板書した。そして、児童と「予想される次の文は何か」という言葉のやりとりをしながら、一文ずつ提示していった。考える課題を細分化し、段階を踏むことによって、思考する課題を「焦点化」する。このことによって特に日本語の読解に難のある児童の興味・関心を引き出すことができた。

最後に「自分だったら最後の文を何にするか」という課題に取り組んだ。

お互いの意見を交流することで（共有化）思考を深め、詩の世界に浸ることができた。


うとてとこ
谷川俊太郎
うとうとうとう
うがよんわ
うとうとうとうと
いねむりだ
てとてとてとて
てがよんほん
てとてとてとて
らっぱふく
ことことことこ
こがよにん
ことことことこと
とをたたく

②小学校５・６年生での授業実践　―理科「月の動き」―

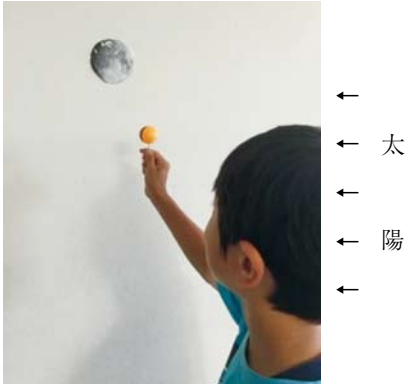
初めに、太陽の動き・月の形についての振り返りをしながら、「月は球の形をしているから太陽光の当たる部分は光り、反対部分は影になる」ということを卓球玉の半分を黒マジックで塗りつぶす作業を通して児童に理解させた。

そして、子どもと共に本時の学習課題を「月の形の見え方が変わるのはなぜか」に精選した（焦点化）。課題解決のために太陽がある壁に新月の月を掲示し、反対側に満月というように月齢に合わせて月の形を掲示した。そして、児童を教室の中心に集め、「壁に貼った月の形と同じ形に見えるように卓球玉を動かしてみよう」と声を掛けた。

子どもたちは、卓球玉を動かしながら自分の目で太陽と月の位置関係を探すことができた。そして、月の見える形は、太陽と月との位置関係が変化することによって月の見える形も変わって見えることを理解することができた。つまり、「月は球の形をしているから太陽光の当たる角度によって、見え方が異なってくる」という科学的な裏付けを基に「月の満ち欠けは太陽との位置関係によって変わる」という理解を深めることとなった。

普段、教科書を基に話し合っていた理科の授業だが、簡単な作業を取り入れることによって、全員が学習へ参加できることを保障し、更に理解を深めることができた（視覚化）。その後、月の形についての考えを互い

卓球玉を月として利用



向きを調整して太陽と月の位置関係を確認

に発表することによって（共有化)、月の動きに対する自分の考えを深めることが出来た。

3．終わりに

今回の実践記録では、UDLの視点を取り入れて実践したサンクトペテルブルグ日本語補習授業校への巡回指導とその実際について報告をした。

そして、「全員が授業に参加できる工夫」と「焦点化・視覚化・共有化の視点での授業づくり」という二つの観点による授業づくりが、日本語補習授業校でも有効であったと考える。

今回の巡回指導では、授業実践を通して補習授業校の教員へ指導法を紹介することができた。また、懇談会を通して日頃疑問に思っていることに対しての質問へ返答ができた。研修の機会があまりないと思われる日本語補習校の教員にとっては、派遣教員が、継続的に指導・助言ができる場があることは、大変貴重であると感じた。補習校への巡回指導については、今後もぜひ継続していただければと考える。

また、今後は補習校の教員が、近隣の日本人学校に来て派遣教員の授業を参観し、その授業を基に研修会を行うことも、よい研修の場になるのではないかと思う。

サンクトペテルブルグ日本語補習授業校への巡回指導を行って、保護者の「子どもたちに日本語を通して友人と関わらせたい」「海外生活をより楽しく送らせたい」「日本国内で学ぶ児童生徒と同等、あるいはそれ以上の学力を付けさせたい」等の強い願いを感じた。そのような強い願いを受けて日本語補習授業校に通う児童生徒は、平日の学校と休日の補習校との学習の両立を目指している。

そして、現実問題として２つの学校で学習内容の定着を目指すことは、並大抵の努力では両立できない。そのような努力を続けている補習校で学習しているすべての子どもに敬意を表したい。

日本語補習校での授業を支える先生方の努力も特筆に値する。

児童生徒の個々の日本語力や知識量、経験量等の差が非常に大きい学級を経営するために、日々の教材研究に取り組んでおられる。先生方の絶え間のない努力と教育に対する情熱により、日本語補習校が成り立っていると感じた。

現任校の新潟市立新潟小学校では、児童全員が参加できる授業、児童全員が分かる授業になるための「新小ユニバーサルデザイン」を学校全体で実践している。

「新小ユニバーサルデザイン」では、「学習のユニバーサルデザイン」の項目を「学習環境」「学級づくり」「授業づくり」という３つの観点から各項目を定めている。

また、「新小ユニバーサルデザイン」は、授業のためだけではなく、問題行動の防止のための積極的な生徒指導という点からも、大切な取り組みだと考えている。

在外教育施設で学ぶ子どもたちは、日本国内で学ぶ子どもたち同様に日本の宝であり、国際社会の宝である。

日本の子どもたちが、国際舞台へと羽ばたき、活躍する日を夢見て、今後もUDLの視点を取り入れた授業づくりについて研修を積んでいきたい。